

フォルシュールキンダーガルテン  
学校移行幼稚園

西ドイツの新聞から



多田 鉄雄 訳

ドイツのキンダーガルテンが、第一義的には社会福祉施設であるから、日本流に訳す場合「幼稚園」とすることは誤解を招くとして、筆者はずっと「幼児園」と訳すことにしているが、ここ十年来、西ドイツが就学前教育の重要性の認識を深めてきていることも他の個所で言及したことである。

このことに関連して五歳児就学が西ドイツの教育審議会で勧告され、バイエルン州では実施に踏み切ったといわれている、その実態がどのようなものか知りたく思っていたところ、最近の新聞記事でその一端を知ることができたので、その全文をここに紹介する。

「人間の頭脳は、満五歳の年齢でその八〇％は発達しており、並々ならぬ貯蔵能力をもっている」

新聞のこのような断定を、両親は十二分に確証することができる。彼らの子どもは、質問し、質問し、質問しつづける。毎日「何のために」「なぜ」に始まり、「どうしてそうなるの」「なんのために」で終わる。そして、両親はこれ以上は辛抱も、答えることも、根気も続くまいと気づくころに、子どもはますます気がのってくるのである。また子どもの「知りたい・経験したいという欲求」が増大するにつれ、

これまで慣れた環境、愛する身近の人々だけではやや退屈になって、もっと大きな世界を体験したくなる。すなわち友だち、仲間、同志を求めずにはほとんど満たされなくなる。知識欲、行動欲は家庭だけではほとんど満たされなくなる。

しかし専門の教育者は、子どものかかる「教育のレディネス *Bildungsbereitschaft*」を操作し、進む道をつけてやり、利用する。彼は、この発達段階における能力と可能性を確実に知っており、その取扱い方をわきまえている。子どもに要求し、子どもを促進させることのできる遊具、教具、遊びの方法などを自由に使いこなすことができる。

ここでもっとも重要なことは、同一年齢児の集団の中で、共同で行なう遊び・仕事・行動に慣れさせることである。そのため、現在西ドイツに学校移行幼稚園 *Vorschulkindergarten* が設置されているのである。この施設を学校幼稚園 *Schulkindergarten* と混同してはならない。後者は身体的、精神的にまだ就学可能にまで成熟していない就学義務年齢にある六歳の遅進児を学級学習可能へ準備する施設である。学校移行幼稚園はもはや幼児園でもなく、初等学校の学級でもない。この施設は幼児園から学校へ通ずる急激なステップをやわらげようとするものである。

われわれは、新らしくできたミュンヘン市の衛星都市の一つにある、学校移行幼稚園を訪問した。朝八時半に約二十五人の子どもたちがやって来る。四列ずつ小さな机が並べられている。熟練した幼児園保母たるベルケ婦人は子どもの前にあって、色彩画の大きな絵本を子どもに示す。農夫の農場から食卓にのぼるまでの、いろいろな基本食品の推移を、子どもたちがいっしょになって追求する。ベルケ婦人が質問すると、子どもたちが手をあげ、指名され、答える。子どもたちは穀物の推移を、種まきから、穫入れ、トラクター、製粉機、製パン場を経て朝食のパンに至るまでを追求する。また牝牛の乳房からしぼられたミルクから、酪農場、販売店を経てブッディングになるまでを追求する。さらに豚小屋の豚の肉から、屠殺場、肉屋を経て、フライパンの中の肉までを追求する。

それぞれの子どもは施設に入る前までは、個々に呼びかけられていた。しかしここでは、教育者は集団に対して話しかけるのであるが、それぞれの子どもは自分に話しかけられていると感じなければならぬのである。かかる注意集中が、すべての子どもにできるとは限らない。ツェンツイという女の子は、自分の前掛けをいじくり、それをたたんだり、伸ば

したりして、眼前で何がなされているか、ほとんど気にかけないでいる。ベルケ婦人はツェンツイを前へ呼び出す。この子どもは絵本の中の動物をつぎつぎに指さして、その名前を言わされる。初めは彼女は何も言わない。ベルケ婦人は子どもの肩に手をかけてやる。震えていた子どもの声が、次第にはっきりし、大きくなり、発表も流暢になる。

この学校移行幼稚園の目標は、子どもが明瞭に、正しい文章で話をし、発表することができるようにすることである。なぜならば心の中で思っていること、頭の中にあること、この宝は、もし言語によって表現されないならば、何の役に立つであろうか。さらに子どもは家庭では方言で話しており、どもりの子どもや神経過敏の子ども、空想好きの子どもなど、これらの子どもは思い切ってしゃべれないものであるが、それが自信をもって、集団に報告、発表できるようになることを、学ぶのである。

次のようなことも重要な課題である。たとえば、ひとりでくつひもを結ぶこと、特に自立性への教育はきわめて重要である。時計の時を読むこと、交通信号機に留意すること、テレビと電気洗濯機と電気釜の場合の、ボタンの操作の相違を理解することなど、いろいろと絵にかいたり、写生したり、

切抜いたりする。なぜならば学校移行幼稚園へ入る子どものうちには、鉛筆の正しい持ち方、鉄の正しい使い方を知らないものさえある。

文化技術のトレーニング——読み、書き、算——はこの学校移行幼稚園では強制されない。子どもたちは遊びの中で文字に親しむようにさせられるだけである。

専門家の見解は「すべての子どもを学校移行幼稚園に義務的に就園させるべき」であるとし、その理由は「子どもたちのうちには、その家庭環境が他の子どもたちより劣っているものもあり、学校移行幼稚園はそのおくれを取もどしてやるべきであり、また学校へのスタートの均等と、教育の機会均等を与えるべきであり、ある場合には、教育障害をもつ子どものそれを取り除いてやる努力をすべき」であるとしている。

フランスでは五歳児の九六%が、義務制ではないが母親学校に通園しており、イギリスではインファント・スクールがこの役割を果たしており、ソ連では義務制になっている。西ドイツでは五歳児のための施設は目下試行段階にあり、各州で相違している。(西ドイツの五歳児の就園率は、幼児園の性格ゆえに、現在でも四〇%に達していないと推定され、その事情が学校移行幼稚園を生み出したものと考えられる。筆者)